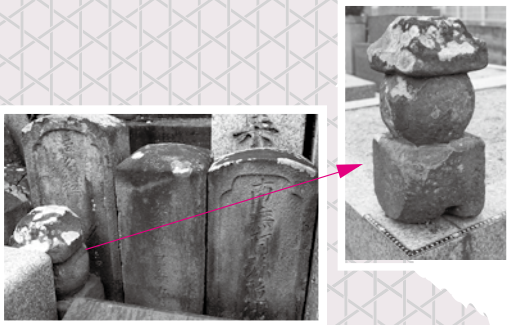
vol.283

上田墓地の一石五輪塔と行基堂扁額

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲完成した「行基菩薩之由来」扁額　右から高橋聖峰さん，西田恵雪さん，西田敏弘さん（上田墓地管理委員会会長）



▲上田墓地（上田6丁目）の一石五輪塔　行基堂真向かいの無縁塔西側のキリークの梵字（左）と北側の一石五輪塔（右）。写真は橋本達也さん（鹿児島大学教授）提供。

室町・戦国時代の和泉砂岩製行基を慕う人々の由来文扁額

上田六丁目に、樋野ヶ池が水をたたえています。江戸時代の史料には、「日野ヶ池」とか「ひのか池」と書かれており、丹北郡松原村のうち、上田村やその分村の反正山村の田畑に水を供給していました。もともと段丘地形の谷筋に灌漑池をつくったのですが、その際、段丘の一部が残され、今のように島状の景観が形作られました。島状傾斜面の北東部からは、古墳時代後半の六世紀中頃の須恵器の窯が見つかっています（「歴史ウォーク」175）。

その樋野ヶ池の北堤に接して、上田・反正山地区の共同墓地が広がっています（上田墓地）。現在、商業施設が建っている南側の駐車場は、樋野ヶ池の北側を埋め立てたものです。同じように、江戸時代からあった墓地の西側に、池の北堤も一部、利用して新墓も拡張されました。

上田墓地には、江戸時代後半から末期の年号を持つ墓石も祀られていますが、十六世紀前半の室町時代後半、いわゆる戦国時代の一石五輪塔が二基、見られることが特筆されます。

墓地中央奥に、江戸時代の阿弥陀如来立像を祀るお堂があります。昭和三十年前後までは火葬場があった場所で、葬儀を行っていました。お堂の背後に無縁塔が祀られ、北側三段目と西側二段目に和泉砂岩製の一つの石で作られた五輪塔が置かれています。北側の石は何も刻んでいませんが、西側のものには梵字のキリーク、つまり阿弥陀如来を表していました。

戦国時代、市域には河内大塚山古墳（西大塚）上の丹下城や、畠山氏が布陣した丹南城・若林城・別所城・三宅城、また三好氏の一津屋城が記録され、各地で戦いがあったようです。その際、亡くなった将兵の供養塔として、上田墓地に五〇〇年以上にわたって伝えられてきたと思われます。

石材の和泉砂岩は、今の阪南市の和泉山脈の山肌から切り取られ、戦国時代から江戸時代にかけて、軟らかく加工しやすかったので、墓石に大いに利用されました。しかし、一方で風化しやすいことから、表面が欠けたり、はがれたりすることから、ていねいに保存する必要があります。

この一石五輪塔の背後に、奈良時代の高僧、行基を祀る行基堂が建っています。堂内に行基坐像を安置していますが、建立は昭和四十六年（一九七一）のことです。その際、地元の西田覚造さんが自宅で蔵する行基の事蹟を記した由来文を提供され、扁額として「行基菩薩之由来」が掛けられました。

行基は、近畿地方を中心に寺だけでなく、橋や灌漑池・堤防をつくって、民衆の力となりました。このため「生き仏」とよばれ、江戸時代以降、行基信仰が広まりました。とくに、葬祭業務や墓守りに従事した三昧聖が各地の墓地などに行基の供養塔を建て、行基をあがめたのです。

市内でも、行基が亡くなって千年にあたる江戸時代半ばの延享五年（一七四八）に建てられた行基墓が小川墓地（小川一丁目）や三宅・別所霊園（三宅東三丁目）に見られます。他にも立部・西大塚地区の小土墓地、岡・丹南地区の浄土寺墓地、布忍（新町）地区の中村墓地にも同様の墓石があります。人々は、古くから行基を慕ってゆかりのある墓地を参拝して、「河内の七墓参り」信仰が広まったのでした（「歴史ウォーク」56）。

上田墓地にも、行基が地域の奥津城を守ってくれていると信じられ、行基堂が設けられたのでした。扁額は五十年の歳月が経ち、劣化が激しくなっていました。このため、上田墓地管理委員会では、昨年十月、旧額を踏修しながら、墓地の概要文も加えて、一新することにしました。材は地元で活躍される国の伝統工芸士で、河内国彫物師の高橋聖峰・高橋孔明さんに長大なひのきの一枚板を加工していただきました。その堅い板面に、やはり地元の著名な書家で、多くの生徒さんを指導する恵雪会代表の西田恵雪（慶子）さんに謹書いただいたのです。

地域の皆さんの協力を得て、行基堂の新たな歴史がスタートしたのです。